

# 市原市小谷田八木遺跡の弥生式土器

藤崎 芳樹

## I

市原市番後台遺跡発掘調査報告書(註1)の中で、須和田式土器が出土した遺跡を小谷田中の台遺跡と報告したが、その後の踏査で小谷田中の台遺跡とは異なることが明らかとなったため、訂正を兼ねて、改めて紹介することとした。なお、本資料は番後台遺跡調査中に調査補助員古閑しげさんから届けられたものである。

遺跡は市原市小谷田字八木 581 番地に位置する。養老川は上・中流域において、その両岸に比高差 15~25m 程の崖面が発達しているが、遺跡付近は幅 500 m 程の沖積地が形成されている。遺跡は養老川を見おろす右岸の標高 57~58m 程の平坦な台地上に所在し、西側は養老川の侵食により造られた比高 10m 程の崖になっており、東側はその支流である小谷田川により開析されている。遺跡付近は現在畑地及び宅地として利用されており、踏査を行ったが、無文の土器片が若干表採される程度で、時期の明らかな遺物は発見できなかった。



図1 遺跡の位置 (1/50,000)

—この地図は国土地理院発行の5万分の1地形図(姉崎)を使用したものである。—

## II

本資料は口縁部を欠失しており、現存高31cm、底径7.7cmを測る。胴部最大径(26.8cm)が中心より上位にあり、頸部(径12cm)が細いため、更に器高、最大径に比して底部が小さいため、胴下半部から急にすばまり、やや肩の張った長胴の感じを受ける。全体の器形は、僅かに残存する頸部から、直線的に延びる筒状の頸部を有し、口縁がやや外側に開く、器高45cm前後の細頸壺形土器と考えられる。

文様は幅4~5mmの押捺の浅い沈線、縄文等で構成され、頸部文様帯、胴部文様帯に分離されている。頸部と胴部の文様帯は2条の沈線により画されており、頸部文様帯は文様構成、単位等の詳細は不明であるが、3条の沈線が縦方向に延び、胴部文様帯との境に文様を構成する1条の沈線が横走している。なお、縦区画と横区画の沈線の集合部には中央部が僅かに凹む瘤が貼付されている。胴部、すなわち胴上部に認められる文様帯は基本

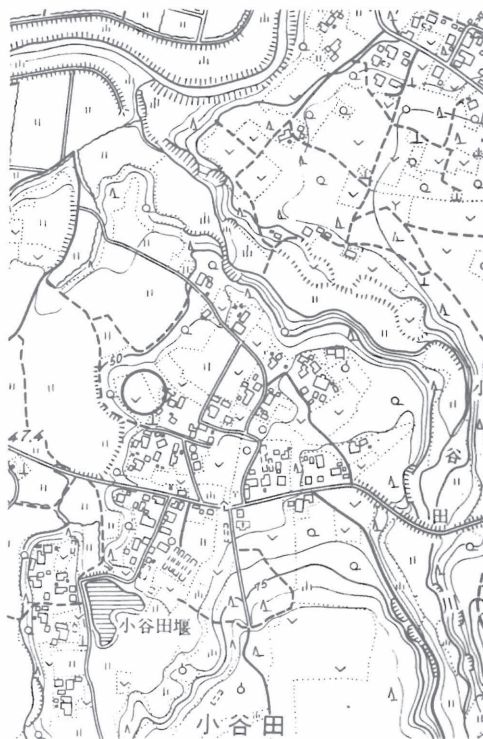


図2 周辺地形図 (1/10,000)

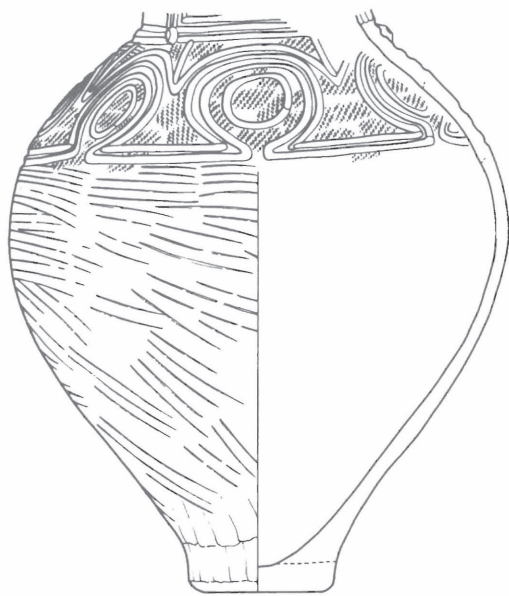


図3 出土土器 (1/4)

的には同心円文により構成されている。同心円文とはいうものの、「Ω」形沈線が二重に巡り、連続しているもので、その中に円形文が施され、最も外側は上向きの弧線文が配されて同心円文を強調している。なお、弧線文谷部は縦方向の沈線により頸部文様帯と接合している。地文の縄文は施文原体LRであり、横回転施文を基調とし、消えている部分も存在するが、故意によるものではない。縄文の施文は器面をある程度乾燥させた後と考えられ、器面への押捺は浅く、また、施文された原体の条は1cm当たり3条認められる。胴部文様帯以下は底部から5cm程では縦方向(下→上)にへら削りが2段に認められ、このへら削りは胴中部の一部において縦方向に小石の動きが認められることから、ある程度器面全体に行われたと考えられる。更にその上に条痕(註2)による最終の器面調整が行われる。この器面調整は1回の施文の幅が1~3cm程であり、この中に2~3条の幅1mm前後の沈線(?)が認められるが、施文幅内部も僅かな凹みが数条認められる。胴部文様帯付近は横方向の上向きの弧状を呈し、最大径付近は横方向または左上~右下の方向、更に最大径以下は左上~右下を基本の方向とする。全体の施文方向は下→上、左→右であり、胴部文様帯付近の押捺が他に比して深い。底部は器面の磨耗が激しく、剥落しているが網代痕と考えられる。内面は

剥落が著しいが、胴上部はやや凹凸が目立ち、胴下部はナデによる調整が認められる。器壁の厚さは6~7mmで、円盤状の底部に積み上げて成形したものであり、底部内面は僅かに尖底をなし、平坦面は見られない。

上記の文様、調整はへら削り→条痕→縄文→沈線区画の順で行われ、胴部文様帯は7単位である。

### III

本資料は耕作中に偶然発見されたものであるが、発見者の話によれば当時の模様は次のようである。

昭和51年頃、畑地に根切り用の溝を掘っていた折、土器を発見したため土器の検出に務め、地表より1m程掘り下げて取り出した。土器は直立した状態で出土し、発見当時は完全な形状を留めていたが、数年間周辺に放置しておいた際に壊れてしまったようである。土器の中には「白っぽいもの」が入っていたため、取り出して土と一緒に近くの墓地に埋めてしまったという。なお、周辺の畑地はローム層までの深さが50cm程のようである。

### IV

上述したように本資料は発見時の様子から再葬墓から出土したものと考えられ、文様、器形等も関東地方近辺に見られる弥生時代中期前半の特徴を備えている。

近年、弥生時代中期須和田式土器は久しく待ち望まれた出流原遺跡(註3)の報告でA類、B類に細分されたが、壺形土器に限っては両者の相異を刺突文の有無に強く求めている(註4)。この分類に従えば、本資料はB類に属する。すなわち、本資料の胴部文様帯は円形文とそれを取り巻く「Ω」形文、更に上部から補充する弧線文により構成されるが、意匠文自体は単純なものである。変形工字文に祖元が求められる菱形連続文、三角連続文は1条の沈線で描けるものを2~3条と多重に描くものであるが、それら以外の一見複雑に見えるこの時期の文様は基本となる単純な文様(円形文、四角文等)とそれを装飾する文様とで構成されている(註5)。

本資料は所謂須和田式土器に属するが、文様、調整、成形等から天神前遺跡(註6)の中段階に類例を見出すことができる。

(1班・長浦上総事務所)

註

- 1) 千葉県文化財センター『市原市番後遺跡・神明台遺跡』昭57
- 2) 条痕であるかハケメであるか微妙である。ハケメについては横山浩一氏に詳しいが、条痕や擦痕についてはその施文具等不明な点が多い。条痕とは1個の木片ではなく、棒状工具等を束ねたものと解しているが、この意味でも貝殻条痕とは異なる。
- 3) 杉原荘介『栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群』明治大学 昭56 なお、須和田式A類、B類についてはこれより先に下記の文献がある。
- 4) 荒海式土器に刺突文が存在することから、刺突文自体の変遷を考慮すべきであろう。なお、荒海式土器の刺突文は円形を呈する小さなものであり、出流原遺跡の刺突文も工具、施文法等から数種類に区別される。
- 5) この時期の土器の胴部文様帯は7単位のものが多いが、7単位という数字を念頭に置けば文様の施文順位も明らかである。
- 6) 杉原荘介他『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』明治大学 昭49

## 千葉市矢作貝塚出土の紡錘車形石製品について

石倉亮治

千葉市矢作貝塚は縄文時代後・晩期の貝塚として知られており、昭和55年千葉県水道局の水道記念館建設に伴いその一部が千葉県文化財センターにより調査された(註1)。縄文時代の遺構、遺物のほかに弥生時代末及び古墳時代後期の住居址も検出されたが、今回紹介する紡錘車形石製品はその中の鬼高期の住居址 003 号址の攪乱中より出土した。すでに報告書において紹介済みであるが、遺跡の性格上縄文時代の遺構、遺物に主眼が置かれたため、本品に関する記述は簡略なものであった。そこで、以下に述べるような本品の重要性に鑑み、調査担当者の了解を得て、改めてやや詳しく

観察と検討を加えてみることにした。

\*

紡錘車形石製品に関する考察は、大正8年高橋健自氏の『古墳発見石製模造器具の研究』が最初である。高橋氏は石製模造の鏡としての分類を示された。その後、伊東信雄・伊藤玄三両氏により巴形石製品をも含めて16ヶ所の古墳を中心とする出土遺跡の集成がなされた(註2)。次いで岩崎卓也氏により31ヶ所の遺跡の集成がなされ、その中で山口県長光寺山古墳と東京都宝萊山古墳を削去された(註3)。さらに穴沢味光・西岡秀雄両氏による集成がなされ、再び東京都宝萊山古墳が追加

